

Ⅱ 事業の成果と課題

1 教育委員会の立場から

(1) 背景

教育をめぐる近年の現状は、少子高齢化、都市化などに伴い家庭や地域での教育力の低下と学校の負担が極度に増大するなどの状況がみられる。これらを受けて、平成 18 年に『教育基本法』が 60 年ぶりに改正され、第 13 条としてはじめて「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の条項が新設された。また、その後、同法第 17 条に規定された『教育振興基本計画』が平成 20 年にまとめられ、その中で「横の連携」と「縦の接続」の重要性が指摘され、「横の連携」として教育に対する社会全体の連携強化——とくに、地域住民や企業等の学校運営や教育活動への積極的な協力・参画、そして「縦の接続」として幼稚園から小中学校をへて社会人の生涯学習まで、一貫した生涯学習社会の実現などが強く謳われている。

「学校支援地域本部事業」についても、これらの考え方にに基づき、「学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもたちを育てる体制を整える」ために、文部科学省からの委託事業として実施したものである。

(2) 実施状況

本市では、平成 20 年度から 22 年度まで委託を受け、東区の北栄中学校に「学校支援地域本部」を設置し、北栄中学校区とその校区内にある北小学校、北園小学校、栄西小学校の 3 つの小中学校区を活動範囲として実施した。

平成 20 年度(委託期間;平成 20 年 12 月 1 日～平成 21 年 3 月 15 日)は、12 月から始まったこともあり、運営協議会及び地域教育協議会を各 1 回ずつ開催し、次年度の具体的な活動に向けた体制づくりと今後の作業方針の検討を行った。委託金額は 461,020 円(確定額)で、うち運営協議会関係が 75,000 円、学校支援地域本部関係は 386,020 円であった。

平成 21 年度(委託期間;平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 15 日)は、事業の周知と学校支援ボランティアの募集を行うため 2 種のチラシを作成し、さらに「北栄中学校区コーディネーター通信」等を発行して、これらの資料を校区内の学校と町内会等に配布した。その後、事業の周知とボランティア募集を重ねて行うためにポスターを作成・配布するとともに、連合町内会を通じ事業説明とボランティア募集のお願いを実施した。

活動としては、北栄中学校での花壇整備、夜間パトロール、総合的な学習の時間のキャリア教育の支援等を行い、また冬の通学路の確保と見守りを兼ねた「除雪ボランティア」の活動を実施するために、活動に向けた意識付けと注意事項の伝達をかねた「講演会」も開催した。年明けには、小学校での「スキー学習」に合わせての支援や北栄中学校で「放課後学習会」も実施した。

平成 21 年度の学校支援ボランティアの登録者数は 52 名で、委託金額(確定額)は 2,986,806 円(うち運営協議会関係が 393,537 円、学校支援地域本部事業関係が 2,593,269 円)であった。

平成 22 年度(委託期間;平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 15 日)は、前年度と同様北栄中学校の放課後学習会やキャリア教育の支援、夜間パトロール、除雪ボランティア等を実施した。

この中で、放課後学習会については、1学期から開始し、回数も増やし、全学年・全教科を対象にして1日20名近くの生徒が参加した。

平成22年度の学校支援ボランティアの登録数は95名で、委託金額は3,117,900円(決算見込額、うち運営協議会関係は377,300円、学校支援地域本部関係は2,740,600円)であった。

(3) 成果と課題

以上の委託期間を通じて得られた成果と課題については、運営協議会及び地域教育協議会等で指摘された事項を基に整理すると、以下のとおりである(「・」箇所は協議会からの抜粋)。

○成果

- ・ 地域コーディネーターが入ると先生方の負担が軽減される。
- ・ PTA活動が、共働き家庭が多くなり思うように活動できない状態の中で、逆にPTAの活動を本部事業で肩代わりしている(「夜間パトロール」等)。
- ・ 学校と地域を結びつけるのは、普通はPTAが行うが、本事業では地域コーディネーターがその役割を果たしている。
- ・ 中学校では、先生方が忙しく、職場体験学習や放課後学習等の実施にあたっては、地域コーディネーターや学校支援ボランティアに手伝ってもらい、非常に助かっている。
- ・ 地域から支援を受けながら、一方でそれを地域に戻していくというボランティアの考え方は大事で、子どもたちが独居老人・高齢者家庭の除雪等、地域にお返しするボランティアを実施するようになり、学校と地域とが太いパイプで繋がった。

まとめると、①地域コーディネーターの調整により学校支援が促進し、教員やPTA事務局の負担軽減と学校の教育活動の充実が図られた、②地域や保護者のボランティア活動を通じて、生涯学習の場、成果活用の場となり、生涯学習社会の実現が図られた、③学校・家庭・地域との連携が深化し、地域全体で子どもたちと学校を支援する気運が高まった等がある。

○課題

- ・ 小学校でのPTA活動や地域と連携した活動が、本事業と重なっており、PTAのボランティアとの仕分けや従前の組織・団体との繋がりをどうするか等大きな問題がある。
- ・ 小学校では、学校支援の依頼先も前からの繋がりがあり、踏襲した方が簡単である。結局、従前の組織があるので、組織を統合するなり、一体化するなど大胆なことをやらない限り、この事業を取り入れることは非常に難しい。
- ・ 学校、児童会館、高齢者施設などの様々なボランティア活動や学校教育部による支援事業(理科支援員、学びのサポーター、学生ボランティア等)等がすでにあり、それらとの整理が必要である。
- ・ 中学校では、中学校区青少年健全育成推進会の区域や組織、取組がかぶっている。
- ・ 地域コーディネーターという立場が全く知られておらず、理解してもらうのに苦労した。さらに、初めての事業であり、学校のニーズが分からず、先生方自体も忙しく話も聞けなかった。
- ・ 地域コーディネーターの適任者を探すのが難しい。

- ・ 文科省では、事業実施単位は中学校区を基本としているが、本市のように小中学校の校区が錯綜している事例は想定しておらず、不都合も生じている。

以上のことなどから、①本事業が、PTA等の既存の組織や活動とほとんど重なっている、②小学校ではまだPTAの組織がしっかりしており、関連団体等との繋がりもあって、現状では新しい仕組みを導入する必要性が低い、③地域コーディネーターの責務は重く、各学校で適任者を確保することが困難である。また、学校での位置づけや身分的な保障も不明確である、④地域コーディネーターが有償で、継続的な予算確保が難しい等が指摘されている。

(4) 今後の展望と要望

今後の展望及び要望としては、以下の指摘があった。

- ・ 学校のボランティアの需要が増加し、PTAだけでは人数を揃えるのが難しくなっており、児童・学級数が減るとPTAのボランティア活動もいつかは破綻する。そうなると地域の方にも助けていただく必要がある。
- ・ 児童数の減少、地域の高齢化が進むと、中学校区での広い繋がりも必要になる。
- ・ 地域との連携を進めるには、学校のランドデザインを学校側から地域にPRすることも大切である。
- ・ よい事業であれば、全部市に任せるのではなく、地域の方もお金を出し合い実施することも必要である。
- ・ 各団体の横の繋がりを地域コーディネーターに調整して欲しい。
- ・ 子どもたちがそれらの支援を体験し、地域に対する思いとか、地域の人々との繋がりやベースができればいい。
- ・ 子どもたちに学校支援ボランティアが関わっているのは、子どもたちも将来的に地域だとか、学校に関わっていくことへの種まきになっている。
- ・ 学校支援のための組織を支える基盤をまちづくりセンター、学校、PTA等のどこに置き、地域コーディネーターがどこに所属して動くのが課題である。学校と地域を結びつける人材を作るシステムを「地域」に作ってもらいたい。
- ・ 学校が逆に地域に返せることは学校施設の開放で、その有効活用を図るべきである。管理は地域コーディネーターに委託し、コーディネーターは学校単位ではなく、地域毎ないしまちづくりセンター等に置けば、少子化に向かい、PTAで支えきれない学校の様々な要望や人的なカバーもでき、地域の方や高齢社会の中でリタイアした人が活躍する場も増える。

以上から、①地域や保護者のボランティア活動による学校支援を効果的に実施するためには、その受け皿となる組織や人材を学校に置くのがいいのか、そうではなく区やまちづくりセンター等の地域に置くのがいいのか検討する、②地域力を活かした学校支援と学校資源を活用した地域住民活動など学校と地域の共助体制を促進する、③学校支援体制の構築にあたっては、既存のPTA活動と連携した一体的な組織づくりが大切である、④この成果を各学校に積極的に情報提供し、既存の組織を活用しながら、今後の学校と地域との連携事業に活かす等が指摘された。

2 実施校の立場から

(1) 実施の経緯

平成 20 年 6 月に行われた札幌市中学校長会の例会・研修会で、市教委生涯学習推進課から本事業実施にかかわる募集案内があった。

北栄中学校では、ここ数年落ち着いた生徒の状況に加えてPTAの活動も完全に自主運営されていた。また、その活動実績は区PTA連合会や札幌市PTA協議会から連続表彰されている。本校が本事業を受託することにより学校全体の教育力をさらに高め、地域との結びつきを一層強めることができそうであるとの願いを込めて応募に踏み切ることとした。

当然、実践校となった際には学校あげての教育活動となるため、全校職員が事業のねらいを理解することと、PTA活動と重複する可能性もあることから、PTA事務局の理解と協力は不可欠であった。そのため、応募にあたっては全職員への説明と今後の見通しの了解、PTAからも同意を得てから立候補の手を挙げた。結果は札幌市における唯一の「学校支援本部事業」実施校となった。そして 3 年間の取組となった。

しかし、文科省より市教委を通じて決定通知が届いたのは 20 年の 11 月末のことであった。20 年度の活動は時間的にかなり厳しいものとなった。大急ぎで地域コーディネーターの依頼・推薦承認から協議会委員メンバーの推薦、事業内容の検討、予算案の提出と翌年の 2 月までの間に「体制」を整えるだけの活動で終わってしまった。また、学校にとって 1 月、2 月は次年度の年間計画、人事異動に伴う校務組織、分掌を決める大事な時期でもある。21 年度の実施案策定にあたっては、学校側担当者の決定や校内施設(執務室)の運用など校内で準備しなければならない事柄も多かった。これら全体を限られた日数内で調整し決定していくことが最も難しかった。幸いにも、本校では全職員の協力によって 21 年度からの事業実践の目途はついた。

○20 年度の活動

※先進地域の視察(校長、新潟市を視察)

- 1) 地域コーディネーターの発掘、推薦、委嘱
- 2) 運営協議会委員の市教委への推薦、第 1 回運営協議会(2/24)開催
- 3) 21 年度校務分掌組織の変更、本事業担当教員の校務分掌への位置付け
- 4) 学校支援地域本部の教室設置(余裕教室の活用)
- 5) 21 年度実施計画案の策定

(2) 事業本格実施(2 年目)

20 年度の運営協議会(2/24)で 21 年度の計画が承認されていた。21 年度からは地域コーディネーターも当初からの村田麗子さんに加え津元万美江さんの 2 人体制となった。市教委生涯学習推進課も本事業の立ち上げにご尽力いただいた中 克尋(なかかつひろ)主査から上野秀一(うえのしゅういち)主査に替わった。

4 月の新学期から本格的に事業展開する 1 年間が始まった。最終目標は生徒のため本校の教育の『質』の向上にある。地域に人的支援を求めるにあたり、1 年間の教育で「ここをもっと充実させたい」「ここを担ってほしい」「これは生徒のためになる」ことを先生方の意見・要望を集約し、可

能なものから実施していくことにした。また、PTAの負担減につながる内容はないかも検討した。3小学校(北、北園、栄西)からの支援要請にも応えていく全体の事業展開を地域コーディネーターにお願いし、これを確立することが2年目の目標となった。この2年目が本事業の勝負の年である。地域コーディネーターには大変なご苦勞をお願いした。

○21年度の活動

- 1) 学校花壇整備ボランティア(中学校)
- 2) キャリア教育支援 職場体験事業所発掘、受け入れ先との交渉等(中学校)
キャリア教育講演会講師ボランティア(中学校)
- 3) 安心安全パトロールボランティア(中学校)
- 4) 学校文化行事(学校祭、コンサート)協力ボランティア(中学校)
- 5) 放課後学習支援ボランティア(中学校)
- 6) スキー学習技術指導ボランティア(小学校)
- 7) 図書館整備ボランティア(小学校)
- 8) 英語活動ボランティア(小学校)
- 9) 通学路除雪ボランティア(中学校)

(3) 事業最終年(3年目)

21年度は矢継ぎ早に事業を行った。各事業の活動が少しずつ地域に理解されていっているように感じられた。そして最終年の22年度は新規事業による拡充よりも個々の事業内容を再検討して、実りある活動となることを目指した。前年度は、「まずはやってみよう」でスタートしたボランティアの募集と実践であった。しかし、一つ一つの内容を吟味する余裕が無かったのが本当のところである。

本格実施の2年目となる22年度は、校内体制の見直し、活動の決定からボランティア募集依頼、実際のボランティアの支援活動までの一連の流れをよくするための手順等の整備を中心に実施した。結果、教員はコーディネーターの役割の重要性を再確認し、ボランティア導入によって教育活動の活性化、内容の充実がはかれることを実感していった。生徒にとってもそれは同じ思いを持っているものと判断している。一言で言えば教師・生徒の関係に地域の人に加わることで「学校」そのものが大きく開かれた。学校が学びの場であることを生徒、教師、地域が改めて認識し、学校で学べること、成長のための貴重な学びの場であることを支援してくれたボランティアの方々も含めみんなが実感できたことは大いに評価できるところである。加えて、多くの保護者にはボランティアの一員として本事業にかかわっていただいた結果、参観日や行事の時に来校して感じる「学校」から普段着のままの姿、日常的な生徒の生活を感じ取ってもらったことは「学校理解」の進展と教師・生徒・親の三者間の距離的感覚も事業実施前と比較してずっと接近したように思える。

○22年度の活動

※ 21年度の活動の継続。

- 1) 新規事業としては放課後学習会の全学年での実施(21年度は第2学年のみ実施)。
- 2) 生徒から地域に対する奉仕活動(地域清掃)の実践。

(4) 成果と課題

○成果

① 教師の負担軽減が図られた。

キャリア教育:講師発掘、依頼、事業所連絡、依頼文書、礼状等の事務等
全校行事の際の保護者対応、PTAとの連携
環境整備等(花壇、安心安全パトロールの保護者組織募集から運営、授業にかかわる
専門外部講師の発掘、依頼等の渉外業務)

② 学力の向上(放課後学習会)

教職員の意識改革……個別指導、学力向上への意識化

③ 外部への学校教育の積極的発信と外部の学校理解、協力意識の向上

④ PTA事務局の負担軽減

コーディネーターの学校常駐によるPTA事務局と学校との連携協力の仲介役

⑤ 地域の方々の学校理解・協力意識の向上、教師へ地域の声の代弁者

○課題

① 地域コーディネーターの適任人材の発掘、身分的な保障

② 継続的な予算の確保

ボランティア保険、コーディネーター人件費、通信費、事務用品、印刷費等々

③ 校内にコーディネーターの執務室の確保

④ PTA活動と連携した一体的な学校支援体制の構築

(5) 今後について

文科省からの委託は、22年度末で終了する。23年度以降、市独自の予算措置がない限り、継続した活動を維持することは極めて厳しいのが現状である。

3年間という期限付きの試みではあったが、生徒、教師共に地域コーディネーター、地域ボランティアの方々のご協力とご支援のお陰で充実した学校教育を展開することができた。地域の方々がどれほど子どもたちの成長を願い、登下校の元気な姿を見ながら期待を寄せているのかを教員一同改めて感じた。生徒にとっては学校内に教師以外の大人が自分達の勉強のために支援しにきてくれている。校外でも協力してくれている人がいることを直接体験できたことは大きな意義があった。それは、生徒にとっても(ボランティアを)受ける側から参加する側にもなろうという変化である。本事業と直結した関係性は検証できていないが、生徒会が中心に行う生徒参加のボランティア活動が校内で盛んになったことである。清掃、募金、奉仕活動など1年間を通してタイムリーに行われるようになり参加者数が増えてきている事実がある。

「学校・家庭・地域」という表現があるが、学校が主体的に動き出すことで地域は大きな大きな「力」を学校に、そして子どもたちに与えてくれることを実感できたことが大きな収穫である。そのため地域コーディネーターの存在は不可欠であることも実証された。今後は、何らかの形で札幌市としてこのような事業を継続的に実施することを切に願ってやまない。

3 地域コーディネーターの立場から



津元 万美江

(1) 実施状況

最初に学校より本事業の説明を受け、北栄地区の地域性とPTAの活動実績から協力することを約束した。この事業の一年目は、北栄中学校PTA会長として地域教育協議会の座長というスタートだった。PTAとして、地域本部とどのように関わっていったらよいか、また中学校区という広い範囲のため広報活動や募集もどの範囲まで広げていくかが大きな議論となった。2年目に地域コーディネーターとして活動を始めたが、まず本事業の広報活動としてポスター・チラシ・コーディネーター通信を試行錯誤しながら作成し、小中学校4校とまちづくりセンターに配布した。次に、先生の支援が最初はどこまで活動していいのか戸惑ったが、どのような支援を希望するかアンケートを取り、その結果から支援活動を開始した。しかし、先生との関わりが地域コーディネーターにどこまで要請できるのか、こちらはどう支援したらよいか、始めはお互いに理解するのに時間がかかった。また、小学校の支援は各校それぞれ地域との関わりや活動があり、北小学校から要請があったのはスキー学習と英語活動の支援のみであった。3年目は担当の先生が替わり新たに打ち合わせし、前年の実績を踏まえた活動となった。

(2) 成果と課題

○成果

- ・子どもが地域の方々と顔見知りになり、また地域の方が学校に関わりやすくなった。
- ・中学校区で行ったので、小中学校の横のつながりができたことと、地域の人材を広い範囲で募集できたので人材確保に有効であった。
- ・忙しい先生と打ち合わせの時間を調整するのが難しく、確認・要件はメールで行ったので、ボランティアへの連絡調整もスムーズに行えた。

○課題

- ・4校のPTA活動がそれぞれ活発に活動されており、地域・学校も独自の取り組みがある中でこの事業として関わるのは難しいと感じた。
- ・担当が替わる時引継ぎをしっかりと欲しかった。

(3) 感想

ボランティアの方からの感想としては、

- ・毎回、子どもたちからパワーをもらい楽しかった。
- ・素直な子どもたちと一緒に活動でき充実していた。
- ・子どもたちを見守りながら、少しでも自分が役にたててよかった等があった。

全体を振り返って、十数年間のPTA活動で得た人脈のおかげで、講師・職場体験等でスムーズに依頼・対応することができた。お互いの信頼関係が、この事業をすすめるにあたって重要なキーワードになると思う。今後は、地域に根付いたボランティアの芽が、このまま枯れることがないように何らかの形で応援できたらと考えている。子どもたちの笑顔と地域の方の優しいまなざしが心に残る活動だった。多くの方々にご協力いただき感謝します。地域力を実感できた活動でした。





村田 麗子

私がこの事業を受けたのは、学校や先生方の忙しい姿を見ていて少しでも支えになることです。そして、支えることによって子ども達により結果が反映されることです。PTAの時とは違った立場から見えてきたこともあり、常に地域コーディネーターとしての役割を考えながら活動させてもらいましたが、これまで活動や要望に対して 100%できたとは思っていません。ただ行ってきた活動の中で先生方やボランティアの方々が少しでも良かったと思えたなら、自分の役割としては大きな成果です。この学校支援においては、まだまだ認知度が低く、課題もたくさんあります。ボランティアされる側、ボランティアする側の双方をつなぎ調整するのはとても時間を要しました。

学校支援の 4 つの役割「つなぐ・知らせる・育てる・支える」は、PTA活動、家庭生活や地域においてもあてはまることで、学校支援ボランティアの方が、学校・子ども達とともに学び、思いを分かち合える活動として支え継続していくのが必要だと思いました。また、今後子どもたちが地域にどのように関わるかとても楽しみです。



鈴木 晴美

私は、1 年だけの活動でしたので、あっという間に終わってしまったという感じです。まだまだ「学校支援地域本部事業」というものを知ってもらえず、冷たく協力を断れる時もありましたが、コーディネーター通信や、学校との協力により、快く支援してくださる方、「いつもお疲れさま」と声をかけてくださる方などたくさんの方に支えられてきました。この事業が終わっても、家庭と学校と地域とが協力し、いつもつながっていることは大切だと思いますので、一母として何か少しでも活動の協力ができたらと思っています。地域コーディネーターという貴重な経験をさせて頂きありがとうございました。